廣瀬川

第78号
平成23年
10月18日

仙台市小学校長会　　発行者／久能　和夫（会長）　責任者／渡部　力（広報部長）

主張

「創造ある教育復興をめざして」
～仙台からの発信を～

副会長　野澤　令照（寺岡小学校）

今年の夏，被災地を応援するためにと東京から届けられたひまわりの種や苗が，仙台市内の小学校や仮設住宅で美しい花を咲かせてくれた。報道で被災を知った国内外の子どもたちや多くの方々からもあたたかい応援メッセージが寄せられた。

大震災から半年過ぎた今でも，子どもたちだけでなく大人たちも不安や恐怖を払拭しきれずにいるが，一方で海外や全国から差しのべられる支援を通して，人と人の絆に触れ，温もりを肌で感じている。

学校再開後，子どもたちの中でいじめがなくなり，思いやりの心が強くなってきたと言われている。生きることの尊さに気付き，世界中から寄せられるあたたかい励ましに触れたことで，子どもたちの心に芽生えた変化に違いない。

東日本大震災が日本にもたらした影響は，計り知れないものがある。復興には，国を挙げての取組と長い時間が必要だが，社会の担い手を育てる教育の使命と責任は，ますます重く大きくなっている。教育に携わる私たちは，震災を通して子どもたちに芽生えた心の変化を失わせることなく，次代の教育を創造していかなくてはならない。競争の教育から共生の教育への転換を実現し，互恵関係に裏打ちされた学校と地域の連携・融合を大胆に推進していくことが重要である。

震災の１か月前，２年間かけて検討してきた仙台市教育振興基本計画が答申された。震災を受けてもその理念はゆるぎないものとして受け止められた。「時代の変化を受け止め未来を切り開いていく力」を育み，「人がまちをつくり，まちが人を育む『学びのまち仙台』」を創造していくことで，復興に向かう新たな活力を生み出し，持続可能な発展を実現できるはずである。

検討委員会には，校長会の代表が委員として加わり，毎回の検討委員会では何人もの校長が傍聴していた。教育者としての誇りと情熱を抱き，次代の教育を真摯に考える多くの仲間の姿を目の当たりにし，感銘を受けるとともに勇気を得た。

仙台市では，今年度を復興元年と位置付け，教育の創造ある復興を目指してきた。全市の小中学生が参加した七夕づくりなどの復興プロジェクトは，多くの市民を元気づけ，大きな反響を呼んだ。これからは，将来を見据えた教育の創造が本格化する。仙台市小学校長会の一員である私たちが，校長としての識見と長年培ってきた経験を生かし，力を結集していくことが期待されている。

支援の手を差しのべてくださった多くの方々の恩に報いるためにも，厳しい環境の中でもたくましく生き抜き，人と人との絆を大切にしながら，世界を舞台に活躍する子どもを育てる教育を，仙台から発信していきたい。

おもな内容

○主　　張 …… 1
○特集・震災「震災体験を生かす教育活動」… 2
○新任校長随想（震災から学び，復興に取り組む私の学校経営）… 5
○編集後記 …… 12
写真で見る 3.11 とその後 …… 13

特集・震災　震災体験を生かす教育活動

語り継いでいく「思い」

湯元小学校　鈴木　修

飯沼勇義さんという方がいらっしゃいます。80歳を迎えられた郷土史家で，以前から「巨大津波が仙台平野を襲う」ことを独学の調査で確信し，時には変人扱いされながら，各方面にその対応を訴えてこられた方です。この震災を機に広く知られることになりました。飯沼さんは，元教員です。昭和39年６月16日，私が６年生だった当時，飯沼さんは私の担任の先生でした。

１　昭和39年6月16日

午後１時１分，「新潟地震」が発生しました。教室で大きな揺れに襲われた時，「机の下に潜れ！」という担任の飯沼先生の指示があったかは，まったく覚えてはいませんが大きな揺れの間，机の下で身構えていたという記憶があります。しばらくしてから，先生は図書室でテレビのニュースを見せてくれました。新潟では橋が落ちたり，アパートが倒壊したりする大きな被害があったこと，仙台も新潟と同じ震度５だったこと。これらはその時のテレビを通して知りました。担任の飯沼先生は，一つ一つ説明したりすることはありませんでしたが，その後も何日か図書室でテレビの報道を見せてくださいました。

２　昭和53年6月12日

私は，小学校の教員になっていました。市の少年野球大会が近く，校庭で練習をしていた夕方５時14分，「宮城県沖地震」が発生しました。発生直後，私は子どもたちを校舎側に集めました。通常なら校庭中央に避難するのが正しいのですが，数か月前にあった大きな地震で校庭には中央に大きな亀裂ができていました。しかし，大きな揺れで校舎の外壁が崩れ落ちてきました。子どもたちのすぐ近くまで落下物があり，「危機一髪」ということばを身をもって実感しました。

３　平成23年3月11日

午後２時46分に発生した「東日本大震災」から半年が過ぎようとしています。正直言って，いまだに校長として自分が行った判断や行動について，自己評価はもちろん整理もついていない状態です。しかし，自分では，震災発生時，およびその後の判断や行動，子どもたちへの話の根底に，これまでに体験した二つの大きな震災の記憶が強くつながっているという気がしています。

４　震災の「事実」と「思い」

この大震災を，教育の中でどのような位置づけで考えるかは，今の私にとっての大きな課題です。

湯元小学校は校舎に損傷を受け，３教室が使えなくなりました。壁にも無数の亀裂ができました。しかし，子どもたちは，テレビなどを通して悲惨な状況にある学校の様子を知っています。そのため自分たちが「被災者」であるという意識はほとんどありません。震災の「事実」については，学校で教えるよりもずっと強烈でストレートなものが，子どもたちに届いています。その点で，学校が実社会と子どもたちの間にあり一定の価値観を育むフィルターとしての役割は薄くなっています。一方「思い」は教えるものではありません。「思い」を持つのは子どもたち一人一人です。「教える」のは，その「思い」を誰かに伝えることの尊さだと思います。

これまでも，本校では地域の敬老会の皆様と交流を行いながら「七夕飾り作り」などを行ってきました。これは恒例の行事で意義のある活動でした。しかし今年は，同じような活動でありながら，何かが違うという感じがしました。「祈りを込めること同じ願いを共有すること」が大きな柱になっていたからではないかと思います。このことは，時を同じく取り組んだ，仙台市全体での「星に願いを！８万人の児童生徒の思い」での折り鶴作りでも感じることができました。大震災を体験して，これまで日常的に行ってきたことに込められた先人の「思い」「願い」を改めて考えることができたのだと思います。

この大震災についての記録はもちろん重要なことですが，この地震で自分が何を感じたのか，それを「語り継いでいくこと」の大切さを教え，それを今，伝えたいと考えています。

特集・震災　震災体験を生かす教育活動

地域を支える学校となるために

根白石小学校　伊東智恵子

本校の校舎は，昭和３年に建てられた仙台市唯一の木造校舎です。３月の大震災では，揺れは長く続いたものの，土壁の角が剥がれ落ちる程度の僅かな被害で済みました。しかし，地域の方々は，児童と校舎を心配し，すぐに駆けつけてくださいました。「ありがたい。」という気持ちとともに,「地域で守ってきた校舎だ。」ということを痛感しました。

夜になり，真っ暗闇の中で避難所を開設しましたが，避難されてきたのは高齢の方６名だけでした。若い方々は,「自分たちは車の中で寝ます。学校に迷惑を掛けてはいけないから，老夫婦だけをお願いします。」と言って帰っていかれました。地域住民のほとんどが本校の卒業生であることを考えれば，本校が避難所に指定されていることは，理解されているはずなのですが，徹底されていませんでした。

早速，学校評議員会で，地域防災についての話合いを行いました。「山あいの家から本校に来るには，足下が見えず大変危険である。一番心配なことは，自分の家から火災を出してしまうことだ。」ということでした。そこで，学校の入り口に非常灯を準備すること，学校の避難訓練の時には地域の方々にも呼び掛け，消火器の使い方を６年生の児童と一緒に実技訓練することなどを決めました。文化財的に貴重な木造校舎のため，非常灯にろうそくなどは使えません。そこで，誘導灯の試作に取り組み，光源として長期停電でも使えるソーラーライトや，用水路を利用したミニ水車による発電装置などを考えています。

また，地区が七北田川を挟んで分断されているという立地条件のため，連合町内会でも一斉の避難訓練はしていなかったとのことでした。高齢者が多い地域のため，すぐに大きな改革はできません。今年度は本校での避難訓練を見ていただき，来年度は中学校と協力し合って，地域全体での避難訓練をしたいと考えています。地震だけでなく，ダムの氾濫，山火事，熊の出没など，あらゆる災害を想定し，地域の避難場所の周知徹底を図りたいとも思っています。

一方，中学校との連携ということでは，今回の災害で中学生が本校の校舎で教育活動をしていたこともあり，今まで以上の連携が図れると期待しています。中学生は，大人と同じぐらいの力仕事ができます。自分で考えて，高齢者の介助や小学生の子どもたちのお世話もできます。人数も多くいるので，長期避難所運営となっても，順番で仕事ができます。これは，今まで考えてもいなかったことでした。今回の報道の中から，ゴミ回収や壁新聞作り，物資配りなど，小学生でもできる仕事があることも知りました。児童生徒の力を十分に発揮できる地域防災計画を作り，小・中学校の教職員がリードして，形あるものにしていきたいと思っています。

当地域では，震災の影響がほとんどありませんでしたが，全国各地から応援メッセージをたくさんいただきました。本の寄贈もありました。子どもたちには，朝会で，どこから届いた物かを日本地図を使って説明したり，保護者や地域の方々には学校だよりで紹介したりしました。多くの人々が，遠く離れている所で自分にできることを行ったり，実際に被災地まで来てボランティア活動をしたりしていることを，これからもしっかりと伝えていきたいと思います。

今，子どもたちは,「がんばろう宮城」というスローガンの基，自分にできることを宣言して，毎日の生活の中で取り組んでいます。節電を目標に掲げた５年生の子は，毎日，校内の消灯を確認して歩いただけでなく，更に効果を高めようと，児童会の議題として提案し，学校全体の取組へと発展させました。

子どもたちは，10年後には地域を支える若者に成長していきます。地域の人々が，大震災の中でも助け合い，知恵を出し合って乗り切った姿を，しっかりと目に焼きつけていてほしいと思います。そして，これからの地域づくりを推進する大きな力をもつ人間に成長してほしいと強く願っています。「子どもはみな地域の宝。子どもたちは地域全員で守り育てていく。」と言ってくださった地域の方々の思いと，人々の役に立ちたいという子どもの願いをうまく融合させていくのが，校長としての地域連携の大きな使命と考え，日々の学校運営に取り組んでいます。

特集・震災　震災体験を生かす教育活動

震 災 か ら 学 ぶ

長町南小学校　及川　節郎

学校は，今回の震災体験を教育活動に生かす使命を負っています。しかしながら，今なお余震が続く中で，まさに震災体験進行中であり，子どもたちの体験を直ちに教育活動に組み入れようとは思えないでいます。特別な活動やイベントを行うことよりは，まずは，子どもたちや保護者の不安を和らげ，当たり前の学校生活に戻すこと，これを第一とし，震災以来の教育活動を進めています。一方で，次の災害時に備えた防災体制の強化や防災教育は，今回の震災から多くのことを学びながらスピード感をもって取り組むべき課題であると考えています。

避難所運営支援の見直し

３月11日。震災発生10分後ぐらいでした。校庭に目を向けると，すでに多くの人が集まっていました。次から次へと広がる人だかりは，児童を引き取りにきた保護者ではなく，隣の大型商業施設（ザ・モールとララ・ガーデン）や地下鉄長町南駅からの大勢の避難者でした。その状況がのみ込めたのは児童の引き渡しを始めた頃で，まったくの想定外の人と数でした。震災の２週間前には，学区内の町内会長さんと避難所運営についての初めての会合を開いたばかりでしたが，日頃面識のない２千名を超える避難者を前に，町内会は組織として十分には機能しませんでした。電気が復旧するまでは全職員で，その後は担任以外の職員と多くの地域ボランティアによる避難所運営が４月３日まで続きました。

たいへんだったのは食料の確保でした。近隣の商店からの提供や，職員が食料調達に奔走したことで，想定の４倍が避難していた最初の３日間をなんとか凌ぐことができました。また，本校はガスヒーターによる暖房のため，ストーブや灯油の備蓄も少なく，毛布の配給が十分になるまでの寒さ対策にはかなり頭を痛めました。

以上の状況により，今後の避難所の開設や運営に向けては，従来の地域町内会等だけでなく近隣の大型商業施設との積極的な連携が必要であると強く感じました。そこで，７月に二つの大型商業施設それぞれの責任者と，今回の震災時の対応について検証し，以下のことについて確認しました。

① 本校への避難を客に案内するだけでなく，指定された区画まで担当が誘導し掌握しておくこと
② 避難所運営への人的な支援を行うこと
③ 食料だけでなく，衣類や寝具・生活用品も含めた幅広い物的な支援を行うこと
④ 発災の時間帯の違いによる対応について，今後，三者で検討していくこと
⑤ 三者の情報連絡体制を確立していくこと

二つの大型商業施設ともに，今回の呼びかけに快く応じ，積極的な支援を検討していただいています。今後，町内会も含めた話合いにより，さらに実際に即したものにしていきたいと思っています

防災教育の見直し

避難訓練の成果でしょうか，今回の震災時，子どもたちは泣きながらでも教師の指示に従い落ち着いて行動することができました。しかし，発災の時間がもう少し遅れていたとしたら状況は一変していました。下校途中だったり，自宅で一人だったりした時に，自分自身で適切に判断し行動できたであろうか？　甚だ自信のないところです。

その後の保護者への引き渡しは，想定外の状況でしたが，職員の落ち着いた行動によりスムーズに行うことができました。これら震災当日の動きを検証し，それを生かす形で７月に引き渡し訓練を行いました。引き渡し場所の確保，整列の順番，引き取り人の確認方法と名簿のカード化などで細かな変更を行いました。いずれも我々大人側の変更点です。登下校時に自分の身を守ることができるように，地域の方や保護者とともに通学路の危険箇所だけでなく安全な場所も知ったり，家族との約束や避難経路を記したマップづくりを進めたりする中で，的確に状況を認識・判断し，適切な行動ができる力を育てていきたいと考えています。

震災からは多くのことを学んでほしいが，今，子どもたちが笑顔で過ごしていることに感謝しつつ，まずは目の前の安全にこだわろうと思っています。

新任校長随想

震災から学び復興に取り組む私の学校経営

子どもたちの希望の光が輝く学校づくり

高橋　充（中野小学校）

1　はじめに

３月11日（金）午後５時16分，Ｍ９の巨大地震による大津波襲来のため校舎が甚大な被害を受けました。子どもの命を守り抜き，安否確認に奔走し続けた教職員にただただ頭の下がる思いです。

2　復興のキーワード

子どもたちの笑顔を取り戻すため，協働型学校評価の重点目標を「安定した気持ちで学校生活を送ることができる子供を100％にする」としました。これは，一人の子どもも見逃してはならないという強い思いから生まれたキーワードです。

3　学校支援ボランティアを生かした学校経営

現在，学生ボランティアが十数名活動しています。担任補助，学習サポート，放課後の遊びや宿題の手伝い等々，学生ボランティアとはいえ教職員と綿密な連携を取りながら活動しています。学生ボランティアと共に教育活動を推進することにより，子どもの心のケア，担任の放課後の時間の確保等に大きな成果を生み出しています。

また，学生ボランティアの眼から見た子どもの様子を担任が共有することは，その子へのかかわり方に大変参考になるところでもあります。

今後も子どもたちへの長期的な心のケアと支援が必要です。本校の実情や子どもの実態に合わせて創意工夫を重ねながら，学校支援ボランティアを生かした学校経営に取り組み，子どもたちの希望の光が輝く学校づくりに努めていきたいと思います。

絆を深める「坪沼野菜村」

大内　啓邦（坪沼小学校）

「優しさを被災地へ，作ろう美味しい野菜とお米」これが，本校の子どもたちが考えた「坪沼野菜村」のキャッチフレーズである。

本校では自分づくり教育の一環として「坪沼野菜村」に取り組んでいる。生活科と総合的な学習の時間を軸として教科横断的に取り組む活動である。春には田植えや野菜の苗植えをし，夏は草取りや水やり等の世話と秋野菜の種まきを行う。秋には，田んぼの稲刈りと脱穀，畑のサツマイモや大根，カブ等の収穫を全校児童が協力して行う。収穫した米や野菜は，給食試食会や学年ごとに調理して自然の恵みに感謝する。また，地域のコミュニティ祭で，「坪沼野菜村」を出店し，工夫を凝らし販売活動を行う。このように，本校独自の特色ある教育活動を通して，働くことの意味を学んでいる。

５月，この「坪沼野菜村」で得られた収益を被災地へ送ろうという話合いが，子どもたちで行われた。そして，「優しさを被災地へ」の合い言葉のもと現在取り組んでいる。この活動は，地域の方々の協力や多くの人々とのかかわりの中で成り立つものである。被災した学校の子どもたちとの交流も生まれる。まさに「絆」を実感できる機会でもある。

「坪沼野菜村」の学習を通して，自然への畏敬の念や命の大切さ，人とのかかわりである「絆」について考えさせていきたい。そして，将来この震災で学んだことを全職員の英知を結集し次の世代に伝えられるたくましい子どもたちを育みたい。

プロの演奏家による学校コンサート

震災から学んだ地域との連携の大切さ

仲野　繁俊（旭丘小学校）

今回の震災では，各町内会のリーダーが中心となって，学校と協力して避難所の運営に当たり，地域の底力と絆の強さを改めて認識させられました。

今回の震災から学んだことは，学校と地域との連携の大切さです。地域の方々と協働して子どもを育てていくために，常日頃から，地域の方々の学習活動へのかかわりを充実させ，目標を共有しながら，地域の方々に見守られて育つ環境を整えていきたいと考えています。

具体的には，学校と地域をつなぐ学校支援地域本部の役割をさらに充実させ，教育活動を活性化させること,学びのコミュニティ「わんぱく森森がっこ」の地域ミドルリーダーの方々と学校が一緒に考え，活動し，相互理解を深め信頼関係をつないでいくことが必要だと考えています。

また，防災教育や環境教育等の教育課題は，地域と共有し，協働して取り組みたいと思います。防災教育は，見直し，避難訓練の中に地域の方々の具体的な関わり方を考えました。自然の怖さと命の尊さを痛感しましたが，身近なホタルの自然環境を守ることで,命の大切さを学ばせていきたいと思います。

心のケアは丁寧に，継続して対応し，他者を思いやる心の育成を図っていきたいと思います。

震災から得た体験を学びや生活に生かし，児童会や委員会活動を通した復興支援のメッセージを発信しながら，地域との連携・絆を一層深めていきたいと考えています。

復興は心の元気から

岩槻　啓子（遠見塚小学校）

新校舎新築工事のため仮設校舎暮らしだった本校では，震災の衝撃は大きかった。２階教室の天井は落ちて中から断熱材が飛び出し，蛍光灯も天井からつり下がっている状況。やっと復旧した直後の４月７日の余震で，また同じ状況に。南北の外壁がはがれ落ちた体育館は，４月中旬まで，ヘリコプターで避難してきた方々の避難所となっていた。

４月21日に市内で最も遅い始業式と入学式を終え，やっと時が回り出したように感じた。子どもたちの明るい声が学校に戻ったものの，体育や遊びの場，授業時数の確保等の様々な課題解決を目指しながらの５か月間だった。

最も大切なのは，どこかざわつく子どもの心を穏やかに耕し，次へ向かう元気を持たせることと感じていた。そこで,「星に願いを」のプロジェクトにあわせて地域の方々の支援をいただいたり，子どもたちが願いを込めた短冊を飾ったり，朝会で国内外からの励ましの「手紙」や「詩」の紹介を行ったりもした。

このような中,「東北に夢と希望を」という趣旨の「壁画プロジェクト」の話があった。工事中の仮囲いに10mを超える壁画を描くというものである。７月末までに延びた授業の中で333名の子どもたちが参加し，大きな壁画作成に取り組んだ。東北各地の祭りが力強く表現された壁画の真ん中には，桜並木と古墳のある遠見塚小が描かれた。このプロジェクトを企画したミヤザキ氏との交流や初体験の壁画制作の過程を経ながら，子どもたちも職員も次へ向かう一歩が踏み出せたように感じている。

故郷復興プロジェクト（あいさつ運動）

人と人とのつながりを大切に

熊谷　和裕（燕沢小学校）

これまでの日常が崩れ，失ったものの大きさにすぐに気付くことはできず，ただただ目の前のことに対応し行動する，３月11日の震災直後は毎日がこのような感じでした。しかし，田子小の教頭として，連日校長先生や職員と寝泊まりする中で，たくさん語り合い，多くのことを学びました。終わりの見えない震災対応でしたが，校長を中心に職員が一つになって，児童の安全確保，避難所対応，授業再開準備等を行いました。校長室は，職員の心身を休める場であり，結束を確かめる場として機能していました。

４月７日の余震は，燕沢小の校長として判断を求

められました。夜中に集まった職員の迅速な行動と協働の姿に，学校への思いの強さを感じ，一つの方向に向かって共に，進む力の強さを実感しました。

地域の方々にもたくさん支えられました。私共を自宅へ招き，風呂と食事を提供してくださったり，夜中に避難してきた人に集会所で休むことをお世話していただいたりと，ありがたいことの連続でした。

震災を経て，今後の学校経営に最も生かしていきたいことは，こうした人と人とのつながりです。それは，職員の結束したエネルギーを日常の学習指導や生活指導により効果的に注ぎ込むことであり，地域の力を，機会を逸っすることなく学校に取り入れることだと考えます。子どもたちの明るい声と，はじける笑顔を，学校から家庭へ，学校から地域へと届けられるよう，学校経営というものを，実践を通しながら学んでいきたいと思います。

日々の教育活動の充実こそ

大江　広夫（袋原小学校）

人間には，幸い想像する力というものが備わっている。震災による影響は計り知れないが，人それぞれその受け止め方は実に多様で，多岐にわたる。

私たちは，まず，子ども一人一人を理解し，寄り添うことを大事にして教育活動をすすめていくことを確認し合った。そして，想像することでつながるということを，様々な機会や場を通して子どもたちに伝えたいと考えた。

6月下旬。全教職員に「記録する」活動を提案した。その後，子どもたちの実態や日常の様子を共有するワークショップ形式の研修会を行い，記録しながら子ども理解に努めた。スクールカウンセラーから子どもたちに働きかける際の留意点などについてアドバイスをもらった。

9月上旬。発災6か月という節目に，作文や絵日記など，文字や絵で子どもたちが自分自身と向き合うための時間を設定することにした。職員で確認したことは子どもの心を深く見つめることである。

自分は一人じゃない，一緒に学ぶ仲間がいるということを日常の学校生活のなかで実感させていくことが，今ほど求められているときはない。一人一人に学ぶ楽しさを味わわせ，自信と自己有用感をもってもらうためにも，日々の授業実践と特色ある教育活動の更なる充実を図っていきたい。

復興元年の決意新たに

柄澤　一彦（中野栄小学校）

この震災から学ぶものはあまりに多く，振り返るには時に過酷でもありますが，それらを教訓として，学校教育に生かしていくことに逡巡があってはならないと決意しております。復興元年に取り組む学校経営として，本校において今年度押さえるべき課題は先ず以下の4点と捉えました。

1　児童の安心・安全の確立

本校も危機管理を重点に挙げ，地震・津波，交通事故・不審者対応，心のケア等，説明責任も勘案し，指導内容再編，マニュアル見直しを進めている。

2　新学習指導要領全面実施への対応

新たな教育課程への腰を据えた地道な取組を通し，質の高い教育活動の充実を図っていくことが，最高最大の課題であり，何より学校に落ち着きを取り戻す根本となると確信し取り組んでいる。

3　中野小学校との連携

生活・健康・安全にかかわる指導を両校共通にし，行事や教科学習もできる限り合同で行い，今，児童は，緊張の垣根を越え楽しく生活している。

尊重し合い学び合ってこそ，両校の特色がより輝き，共に創造の花を咲かせていけると思う。開かれた学校として，共に進んでいきたい。

4　地域力の一層の活用

学区の地域力はすこぶる高く，学校と児童を大切にしていただいている。協働性確立の中，地域力の活用は，もはや経営上の手段ではなく目標であり，基盤となっている。

子どもたちを真ん中にして

森屋　勝治（沖野小学校）

私は，震災後「子どもたちの輝く笑顔」に何より励まされました。多くの教職員はそれまでと子どもを見る目が確実に変わったと確信します。私の勤務する沖野小学校でも不幸はありましたが，子どもたちは元気に登校しています。その姿に「感謝の気持ち」と子どもたちのためよりよい実践をと一層強く「願う気持ち」は，本校教職員の一致するところです。

さて，「今だからこそできること」が問われています。私は，実践者としての教職員の力，そして保護者，地域の力を信じ「子どもたちを真ん中にして子どもたちのために仕事をしましょう。」と提案し

ています。

そのために教職員には「指導目標を明確化すること」＝「具体的に何を理解し，何ができるようになればいいか，端的に言い切れて，なおかつ実際に達成できたかどうかが，はっきりと誰にも判定できるもの。」（野口芳宏著「指導」から引用）を求めています。また，保護者や地域の方々には，「未来を創る子どもたちをみんなで育てていきましょう。」ということを中心に情報を発信しています。さらに沖野中学校区の校長のリーダーシップのもと小・中学校がスクラムを組んで，保護者や地域と太いパイプをつないでいく実践に取りかかっています。

本校の最大の課題は「学力の向上」です。今だからこそ物事をポジティブに考え，教師一人一人の願いを実現する学校，協働の精神あふれる教職員を目指して学校経営にあたっているところです。

「力あわせ」「心あわせ」歩みたしかに！

柏木　孝之（郡山小学校）

赴任前日まで，震災後の対応に追われ慌ただしい中で当日をむかえました。赴任する郡山小は広瀬川・名取川に挟まれ，大きな被害を被っているのではと思っていました。川の向こうでの被害の大きさに比べ，受水槽が破損し使えないなどのことがあったものの，思いのほか被害は少ない状況でした。授業再開にあたり，とにかく子どもたちの正常な学校生活を取り戻すこと，そして心のケアに努めることを考えながら，校長としてのスタートを切ることとなりました。

震災後，当初は学校が中心となり避難所を開設していたものの早くに地域の方々が運営にあたったと聞きました。町内の連帯の強さがあり，人と人との絆があり，地域の支援・協力があったからこそ学校再開も早くできたと感じています。その地域の中にあって子どもたちに改めて地域の力や人と人との絆の深さを感じ，地域の一員としての自覚をもってほしいと願っています。

同時に「復興」のために「自分たちができること」「自分たちがすべきこと」を考え，いろいろな活動に取り組んでいるところです。

そして,「復興」にむけて郡山小の校歌にある「力あわせ」「心あわせ」歩みたしかに・ゆたかにたくましく生きる児童の育成を目指していきたいと思っています。子どもたちが「笑顔」で「元気」に夢をもって健やかに成長できるようにと。

あらしに耐える小さな芽

猪股　亮文（茂庭台小学校）

子どもたちが歌う校歌を耳にする度，私の心に響く一節があります。「のびよけやきの小さい芽　あらしに耐えて根は深く　希望にみちて天高く」が，それです。本校も，使用できる校舎や教室が限定されるなど，震災が子どもたちの学校生活に影を落としています。あらしに耐えるけやきの小さな芽は，まさに，不自由な学校生活にあっても，けなげに頑張る，眼前の子どもたちの姿と重なります。

茂庭台地区には，この子どもたちが，あらしに負けずに天高く伸びていけるように，しっかり支えてくださるＰＴＡ・保護者の方々や，日頃お世話になっている地域の方々が,たくさんいらっしゃいます。初回の学校関係者評価委員会では，子どもたちが社会の担い手となる将来に思いを寄せつつ，意見交換を行いました。そして，小・中９か年でやり遂げなければならない究極目標を「自己表現できる茂庭っ子」とし，今年度の重点目標を「相手の話を最後まで聴き，相手に分かるように話すことができる子ども」といたしました。加えて,委員の方々からは,「子どもたちの成長を支える私たち大人が，学校・家庭・地域で子どもたちに自ら範を示しましょう。」との力強いご提案もいただきました。

「子どもたちのよりよい姿の実現のため，心を一つに！」を合い言葉に,天高く未来に希望をかかげ,「自分の根」で，しっかり歩むことができる子どもたちを，家庭と地域と学校とが力を合わせてはぐくみたいと考えています。

福興　～心を一つに～

今野　和賀子（幸町南小学校）

今年度の児童会スローガンは,「福興～心を一つに～」です。まず自分たちにできることを精一杯やり学校を良くして幸せにしていこう，学校を起点に家庭・地域へと幸せの種をまいて大きな花を咲かせようという子どもたちの願いが込められています。

今年度の学校経営の柱は,「①組織的・継続的に取り組む学力向上」「②日常的な心の教育」「③家庭や地域との連携強化」の三つです。

学力向上では，基礎・基本の一層の充実と読書の

楽しさの体得を目指し，三つのプロジェクトチームによる校内研究推進と今年度の標準学力検査結果を基にした学力向上プランの作成・実践を行います。特に，授業中の書く活動を重視しノート指導に力を入れるとともに，読書タイムでは担任やボランティアによる本の読み聞かせを継続します。

心の教育の面では，自己存在感や有用感，互いを思いやる気持ちの醸成を目指し，ペガサス祭り等児童会行事やたてわり活動を充実します。明るい挨拶や言葉遣い等の言語環境，音楽や花，掲示物等を通した情操教育の充実と規範意識の高揚に努めます。

家庭や地域との連携では，三者スローガン「オアシスでふれあう地域すてきな笑顔」の下，挨拶ときまりを重点目標にした協働型学校評価のＰＤＣＡを推進します。また，中学校区合同研修会では，他校種，市民センター等との連携による外部講師を招へいし，安全管理の徹底を行います。価値ある本物の「和」をつくりあげることにまい進したいと思っています。

たくましく生きぬく沢っ子の育成

杉　肇子（大沢小学校）

教職員を前に,「震災後,前年度踏襲とはいかない，苦難の年になることでしょう。しかし，力を合わせて楽しく仕事をするために，一人一人の児童を大事にするために，チーム大沢小の一員として，考え実行しましょう。」４月着任後，私がはじめに伝えた言葉でした。困難な時だからこそ，先生方が笑顔で元気に，個を大事にし，一人で背負わず協働で子どもたちを育んでほしいという思いからでした。

あれから数か月，学校教育目標「健康で創造性に富み，心豊かでたくましく生きぬく沢っ子の育成」の具現化に向け，教職員とともに悪戦苦闘の日々を過ごしています。特に,「たくましく生きぬく」という文言を咀嚼した時，震災後多面的な視点から得られた教訓を教育内容に反映していくことが必要と考えています。

幸いなことに，今年度の学校・家庭・地域三者の共通の取組として,「粘り強く課題に取り組む児童」を，めざす児童像と定め，具体的な実践を進めているところです。課題に対する児童の目的意識の視点，児童の自己評価の視点など，三者連携して行うことが学校教育目標に迫る手だてだと考えます。

体育館が被災し使用できないなど施設面での不便さはありますが，三者の知恵と工夫と協力で乗り越え,「たくましく生きぬく沢っ子の育成」をめざし，ただいま奮闘中です。

復興は子どもたちの笑顔　授業から

金子　倫昌（秋保小学校）

３月11日の東日本大震災では，幸いにも子どもたち・教職員にけがもなく，学校施設にも大きな被害は見られませんでした。また，地域のライフラインも比較的早く回復しました。そのため，大きな被害を受けた地域に比べると，子どもたちの震災に対する受け止め方に大きな温度差があると感じました。

そこで，授業再開に当たり「復興は子どもたちの笑顔，授業から」「被災を他人事として受け流さない」ということを共通理解し，教育活動を実践していくことにしました。

まず，子どもたちの心のケアと居心地の良い学級づくり，分かる喜び・できる楽しさが味わえる授業づくりに重点をおき取り組みました。また，完全給食になるまでのおよそ１か月間は，震災についての認識を深め，体験を共有するために，副食は持参させずパンと牛乳の簡易給食のみとしました。

そして，生活に少しずつ落ち着きが見られるようになってきてからは，震災・復旧・復興に関して自分が見聞（行動）したことや新聞記事などを活用して学習に取り組ませたり，風評被害やボランティア活動の意味などについて考えさせたりしています。

これらのことから絆の大切さに気付き,「今，自分ができることは何か」を自覚し，行動できるような子どもたちにしていきたいと考えています。

復興の第一歩は授業の充実からです。授業での子どもたちの笑顔が，きっと，明日そして未来の仙台市・宮城県をつくってくれると信じています。

プロの演奏家による学校コンサート

震災の経験を生かして

鈴木　秀男（福岡小学校）

この未曾有の大震災により，私たちは，これまでほとんど体験することのなかった「恐怖」や「不安」，「悲しみ」を味わった一方で，「思いやり」の大切さを感じ，家族や地域の人々との絆や関係を深めた。

1　避難所開設と教職員のかかわり

前任校では，年に１度実施している連合町内会主催の防災訓練が，この震災時に生かされた。地震発生直後，子どもたちの引き渡しの最中，連合町内会長と校長が協議し避難所を開設した。その後，10日間，町内会が主となり，学校がサポートする形で運営が行われた。教職員は，食事の世話や生活用水の配布等を中心に支援に当たり，早番と遅番の２つの勤務体制が効率的に機能し，地域との連携も十分に図られた。

2　防災教育計画の見直し

震災時に学校が避難所として有効に機能するためには，地域との信頼関係・連携が重要であることを再認識した。学校と地域が連携して，地域をあげての防災訓練を定期的に行い，震災に備えることが大切であることを学んだ。また，即時の停電・断水等ライフラインの遮断や食料不足等への対応のあり方で新たな課題も見つかり，防災マニュアルの見直しが急務となった。この経験を踏まえ，勤務校においても防災計画・防災マニュアルに，より具体的な内容を加えるなど修正を行った。そして，保護者や地域との連携をさらに強化し，一体となって防災教育を推進し，心のケアに取り組み，安全・安心を第一と考えた学校経営に努めなければならない。

子どもたちの笑顔のために

渡邉　大助（向陽台小学校）

「子どもたちの笑顔があふれ，どの子も安心して学べる学校」これは，どのような状況にあっても，集団で学び合いを進める学校にあっては，常に求めていかなければならない基本であると考えます。そして，今回の大震災を通して改めてその重要性を痛感しているところです。

まず，児童の安全確保です。余震も続く中，地震対応の具体的な方策を保護者とともに再構築し，共通理解を図ることが必要と考えます。地震対応は急務でありますが，その他の自然災害や不審者対応等についても，改めて検討していくことが，安心・安全な学校へつながるものと考えます。

次に，心の教育の推進です。人と人との触れ合いの中で，助け合うこと，思いやりの気持ちをもつこと，みんなのためにすることなどの大切さを，これまで以上に意識しながら教育活動を進めていくことが必要であると考えます。そのためには，清掃活動，当番活動，委員会活動等，毎日の活動に充実感をもって，積極的に取り組む子どもたちの育成に力を注ぐことが重要であると考えます。また，クラスや学年を超えた異学年の交流なども見直されるべきことと考えています。

学校・地域・家庭の協働が，すべての基本になることは言うまでもありません。三者それぞれが何をするべきかを考える前に，未来を担う子どもたちのために一緒に考えていこうという姿勢を大切にしていきたいと強く感じています。

新任校長として，今思うこと

栗林　八重子（鶴が丘小学校）

学校の周囲に生い茂る木々の葉が，真夏の太陽を浴びながら，光り輝いています。そして，その深緑の森から，鳥や蝉の声が聞こえてきます。今，鶴が丘小学校は，心地よい静寂の中にあります。

思えば，いろいろなことがあった４か月でした。東日本大震災後の避難所対応や先がよく見えない中での校務，そしてガソリンがない中での毎日の通勤等……。正直なところを言えば，４月１日の着任は疲れ切った中での緊張と不安でいっぱいでした。そして，その後の４月７日の余震。本校の被害は大きく，子どもたちを迎えることができたのは，予定よりも一週間あとの４月18日でした。始業式と入学式を終えた時の安ど感と何とも言えぬあの感動は，まだ鮮明に記憶に残っています。

その後も，この夏休みまでの間は，先行き不透明な中を無我夢中で過ごしてきました。今年度実施予定の開校三十周年記念事業のこと，運動会の実施時期等，校長として判断すべきことがいろいろありました。

大震災を経験した今，改めて，子どもたちに伝えていくことは何なのか，今後の復興を担う子どもたちに必要となる「生きる力」とは何なのかを考え続けているところです。この子どもたちが，夢や目標に向かってよりよく生き，そして，自己実現を図る

ことのできる教育活動を検討し，一番大切な子どもたちや地域の実態等の把握に努めたいと考えています。

余震対策と心の教育

白石　光彦（住吉台小学校）

国蝶オオムラサキの舞う住吉台小へ赴任して早５か月が過ぎました。震災から学び復興に取り組む学校経営として，以下のことを行ってきました。

余震対策

・避難訓練・引き渡し訓練の実施の仕方，回数，時期の見直し
・各種行事（入学式，運動会，修学旅行，野外活動，校外学習等）の余震を想定した対策
・大きな余震発生時の学校対応（引き渡し，学校預かり，連絡の可否等）の見直し

始業日の避難訓練，修学旅行での自主研修の範囲縮小と宿での避難訓練を行いましたが，どちらも実施当日の夕方に大きな余震がおき，「想定外」は許されないということをあらためて実感しました。

心の教育

住吉台中学校が校舎被害のため，４月当初本校校舎で小１から中３まで共に学ぶ機会ができ，それを契機に授業交流等の小•中連携を一層進めています。

・震災時の人々の行動とその行動への世界中からの尊敬と励ましを資料とした授業実践
・復興プロジェクトへの取組

児童の命を守り，危機に対処する力を身に付けさせ，将来への希望と気力を育む学校経営を目指し，ささやかな取組を重ねてまいりたいと考えています。

安全・安心な学校
－地域・保護者とともに－

飯村　俊幸（館小学校）

本校での震災の被害は幸い軽微で済みました。しかし，大きな地震や停電の不安な夜を体験した子どもたちは,広義の被災地の学校の子どもとなります。「安全・安心な学校」は大きなテーマです。

子どもの安全は学校だけで守れるものではありません。また，学校は児童の安全だけを考えるわけにはいきません。震災時の引き渡し，避難所開設，その後の避難所運営と，めまぐるしく状況が変化する中で，本校でも学校と地域の絆が自然に生まれました。震災直後の避難所開設時には，教職員の献身的な協力がありました。その後の避難所運営に大きな力となったのは，連合町内会を中心とする地域の皆さんでした。この地域では，定期的に地域で防災訓練を実施してきました。その蓄積が今回の震災の避難所運営に大いに役立ちました。

地域と学校の連携は，６月には学校と町内会との合同の避難訓練の実施に発展しています。日々の連携を深めて，地域全体で子どもを見守ろうという意識を大切にしていきたいと考えています。

先にも述べましたが，本校は震災の被害がほとんどなく，市内でもライフラインの復旧が早い方でした。しかし，中には不安を訴える子がいたり，下校後のけがが増えたりと，震災は児童の心に影を落としているようです。さらに，原発の問題にも配慮しなければなりません。本校にも原発事故の影響を避けて転入してくる子どもが見られるようになりました。異なった体験をしてきた子どもをどう受け入れるのか，新たな課題も見えてきました。

学校・保護者・地域が力を合わせて，安心な学校づくりの基盤となる一人一人の心のケアにも注意を払わなければならない。そのことを改めて痛感しています。

地域に寄り添う

長谷　一哉（栗生小学校）

４月の転勤で,二つの学校の避難所を見聞きした。一校は津波の直撃を受け辛うじて命が助かった方々を受け入れた学校。片や避難された方々がほぼ地域の住民だった学校。そこでは学校の果たすべき役割が異なっていた。また，ある学校では地域住民に加え，不特定多数の避難者を受け入れざるを得なかったとも聞く。避難所となった学校が抱えた状況は予想をはるかに超えていた。

この震災から，何を学び学校経営に生かしていくのか，二つの学校の経験を通した感想を記す。

震災直後，着の身着のままで避難した方々は命以外何もかも無くしていた。この方々に様々な物資の提供を働きかけたのは地域，ＰＴＡの皆さんであった。避難所となった体育館に町内会長さんが毎日顔を見せる。近所の方が食料を差し入れる。必要なものはないかと尋ね,メールなどを使い物資を集める。お風呂の提供を申し出る。被災者を支えたのは地域の皆さんだった。

他方，地震発生後，いの一番に駆けつけ避難所開

設の準備を手伝ったのは地域の町内会長さんや消防団の方だった。住民への呼びかけ，避難者の受け入れ，電気・暖房の確保，トラブルの対応。献身的に御協力いただいた。頭の下がる思いである。

地域連携が求められている。連携は学校が創り出すのではない。地域はすでにその素地を十二分に有している。学校がいかに地域に寄り添うかが問われている。二つの学校の経験を通して強く感じたことである。

震災から学ぶ学校と地域との関係

春日　文隆（柳生小学校）

３月11日の東日本大震災では，学校が避難所開設・運営を求められ，地域住民の避難所として大きな役割を果たした。

私が，今回の避難所運営の取組から感じた最も大きなものは，学校と地域との関わりである。中田西部地区には本校を含め，西中田小学校，柳生中学校の３校が存在する。３校とも，５日目には避難所を閉鎖することができている。これは，当地区が建物の倒壊等はなく，室内家具等の転倒による居住困難による避難が主であったために可能となったものである。

しかしながら，震災直後の混沌とした状況を考えれば，これだけ迅速に避難所閉鎖を判断し，実施に踏み切ることができたのは，連合町内会長をはじめとする強固な地域の基盤があったためと受け止めている。

この経験から，地域との関わりについて，今，次のようなことを考えている。それは，この柳生地区の地域としてのまとまりを生かすことは，単に，子どもの豊かな学習活動を促すということだけでなく，「将来，自分たちも進んで地域，あるいは学校のために貢献しよう」という気持ちを子どもの心の中に育むことが期待できるということである。

学校と地域との協働により，地域の教育力を高め，それが，また，震災により，学校と地域との協働関係の質を高めていくことについて，今回，改めて認識させられた次第である。

アメリカの小学生から届けられたメッセージ

編集後記

2011年３月11日14時46分18秒，東日本大震災が発生，仙台市宮城野区で震度６強を観測するなど，市内全域が震度６弱以上の激しい揺れに襲われました。その後，発生した津波や強い余震は，市内各地に甚大な被害を与えました。改めて，犠牲になられた方々や被害を受けた方々に，心からお見舞い申し上げます。

市内の各学校は震災直後から避難所となり，避難者への対応に奔走する学校が多数出ました。その後は避難所運営と平行して学校再開への準備を進め，再開後は震災から学ぶ教育活動の展開に奔走している毎日のことと思います。

この経験を後世に伝えるとともに，これからの学校経営に生かすことが，校長会として喫緊の課題ととらえました。このことを踏まえ，廣瀬川78号の編集に当たっては，震災直後から半年間の取組について各地区から３校の取組を紹介するとともに，新任校長先生方に焦点を当てて特集を組むこととしました。私たち校長は，震災を受けての課題に向き合い，明確なビジョンとリーダーシップが一層求められています。今回の特集が，今後の学校経営の一助となれば幸いです。

最後に，ご多用にもかかわらず，快く玉稿をお寄せいただいた校長先生方に厚く御礼申し上げますとともに，会員の皆様のますますのご活躍を祈念いたします。

編集担当：狩野孝彦（鶴巻小）　高谷公美子（南小泉小）　千葉　尚（東仙台小）
森　礼子（鶴谷東小）　渡部　力（東六番丁小）

廣瀬川は「仙台市小学校長会」のホームページでもご覧いただけます。

学校教育復興に向けた
6か月のあゆみ

希望の桜である。避難所となった体育館に一輪の花を咲かせた。

教育活動の再開と復興を目指して懸命に取り組んできた6か月である。これまで以上に，ＰＴＡや地域等と共に歩んできた半年でもある。

東日本大震災直後から，創造ある復興を目指している現在の学校の取組を写真で追う。

３月11日，地震直後の仙台駅近くの小学校である。校庭は，近隣のデパートや会社からの一時避難者，駅からの帰宅困難者であふれる。立錐の余地もないほどに避難者が押し寄せた。保護者への児童の引き渡し（写真奥）と避難者誘導とが同時に行われた。雪がちらつく寒い日であった。

仕事着の避難者の姿も見える。着の身着のままの避難であった。

児童用ロッカーからは物が飛び出し，天井から蛍光灯が落ちた。校舎内も大きな被害を受けた。

避難所となった体育館。ステージでは，教職員とボランティアが，備蓄物資を配給した。

体育館に置かれた一台のストーブに身を寄せ合いながら，寒さと不安に耐えた。

あの日を境に！　私たちの学校・故郷は……

～震災前の風景～

子どもたちの元気なあいさつが交わされていた。

校舎からは，自然と調和した美しい私たちの故郷が見えた。

～震災後の風景～

津波は校舎２階まで飲み込んだ。ベランダにがれきが見える。

体育館周辺には，がれきと化した車などが山のように押し寄せた。

がれきは，１階廊下の天井まで埋め尽くした。

翌朝になっても学校周辺は，海水で水没したままであった。写真奥に見える煙は，精油所の火災によるものである。

学校周辺の風景は一瞬に変わり果てた。この惨状を目の当たりにし，涙が止まらなかった。

一夜明け，校舎内に避難していた児童・教職員・住民が全員無事救助される。

教育活動の再開に向けて

音楽室で行った卒業式（３月28日）

卒業式終了後，体育館の避難者に歌を披露する。

近隣の市民センターホールで行った卒業式（３月30日）

授業の再開に向け，近隣の小・中学校等に，机や椅子，オルガン等の学習用具を運ぶ。（４月６日）

他施設を借りて教育活動が再開できた。特別教室をパーテションで間仕切りし，普通教室とした。

学校は，それぞれに工夫した故郷復興プロジェクトに取り組んだ。児童生徒の元気を取り戻し，地域に元気を与えるために。（５月11日）

校長とＰＴＡ会長による鼎談。試行錯誤が続き，課題が山積する中，子どもたちに笑顔を取り戻すための大人の願いや希望が語られた。（７月７日）

児童生徒による故郷復興プロジェクト

「星に願いを！復興への８万人の児童生徒の思い」（仙台七夕まつり）

今年の仙台七夕まつりは，「復興と鎮魂」をテーマに開催された。

仙台市内191校の小・中学校，中等教育学校，特別支援学校の児童生徒による折り鶴８万羽と，教職員，保護者等によるくす玉・吹き流しが，夏の大空に揺れた。

願いよ，届け！一日も早く，笑顔のあるもとの生活に戻りますように。

児童生徒は，和紙に願いを書き，教え合って鶴を折った。

制作者数は，述べ約2,000人。ＰＴＡ，社会学級，参加企業，校長等が８万人の願いをつなぎ合わせた。

人々は，短冊に込められた願いに思いを寄せた。